ぬれ髮　——水野仙子——

お榮さんが懷手をしてよつかゝつてゐる障子に、ぱつと羽音がして鳥影がさした。窓の閾に腰をかけて、松葉のやうに組んで斜めに投げ出した足に、絹物が裾さばきよく纏はりついてゐる。少しはみ出した襦袢の赤いのを知らん顏でゐる。なんて嬌かしいんだらう。もう三十を越してるんだのに、まだかうして赤いものを身につけて、平氣で身の納まりをつけないでゐる。尤も一度は嫁いだのだけれど、嫉妬（やきもち）やの旦那に凝り〳〵して飛び出してからは、窮屈な家持には決してならないといつて、ひとりで自由に、不思議なお榮さんの興味に耽つてゐる。お榮さんの興味とは、男をちよいと釣つてみることなんだ。そして肝甚なところに行くとどんと投げ出して了ふ。それでさよなら！

「ちよつとまあ、勝負事がいくら止さう〳〵と思つても止せまいやうなものね！　情けない生れつきさ！」と投げ出すやうにお榮さんは言つてゐる。全く生きた人間が人形のやうに動くんだから、此上の面白いことはないかも知れない。お榮さんはさうしていろ〳〵な男を操（あやつ）りながら、お榮さんの一生はそんな風な興味に操（あやつ）られて行く。それだのに——或はそれだから、お榮さんはほんとの戀をしたことがない。ほんとの戀つていつたところで、人によつていろ〳〵その意味が違ふんだらうけれど、少くも犧牲的な心になつたことがないとお榮さんは言つて居る。それはお榮さんにだつて、燃えたことはある。たつた一度、十七の時に初めて人に戀はれて、その人を好きだか嫌ひだかわからないで自分も一緒になつて燃えた。まあ、戀として一番印象に深いのはそれ一つだと言つてゐる。私が若しもほんとの戀を、私が憧れてるやうな戀をすることがあつたら、恐らくそれは私の死ぬ時でせうとお榮さんは言つてゐる。

お榮さんは洗髮を日向にほしながら話した。私はその濡れた髮が黒く艶々として、時々少しのほつれが障子の影になるのを、日向に醉つたやうな氣持でぼんやりと眺めながら聞いた。「ぬれ髮のお榮———」心がこんなことを呟いてゐた。

お榮さんはどうやら洋妾までもしたことがあるらしい。この人の口から話されると、新しくて面白く、そしてもつと體裁のいゝことであるけれど———。次の話はお榮さんが十八の時だつたていふから、初めてぱあつと燃えた戀の火が、そろ〳〵下火になりかけた頃のことなんだらうと思ふ。なあになんでもない、今からすると、罪のないたわいのないことなんだけれど、それがそも〳〵お榮さんが男つてものに試みた興味の初め

なんださうだから。

　私が母の故郷のある海國に、お祖母様の病氣かなんかで暫く母と一緒にかへつてゐた時のことなんです。その頃父の任地は北國の雪深い小さな都市で、軒の低いやうなそこの官舎に、多勢の兄弟と兩親とがそれは賑かに住んでゐました。私は久し振りでそのたわいもなく賑かで面白い日々から離れて、自分で自分のほんとの息を吸ふことが出來るやうな氣がしました。それに、これがまあおんなし時節かと思はれる程季候の違つた、暖かい南國の海邊なんですから、一日は一日と引締つてゐた私の肉がほどけ、さうして私の血は何かに掻きたてられてゐるやうになつてゐました。なんともいへない明るい色の中に眼覺めて、今まで人の肌に抱かれてゐたやうな温みをもつた潮風に包まれた私の心は、何か物語に憧れるやうな、譯もない嬉しさやもどかしさに溶けあつてゐました。

　或日なんの氣なしに家を出て、松林の中をぶら〴〵歩いて行くと、ふと濱邊の白い砂に足跡をつけて、ゆつくりした足取りで歩いて來る一人の男がありました。繁さん――――？と私の心は呟きかけたが、立止つて凝乎と見つめてゐると、どうやらさうでもないやうなんです。

　私は從兄の繁樹さん――商船學校の生徒だつた――と造作もなく仲善しになつてゐました。私は譯もなく繁さんが好きになつちまつてました。お負にいゝとこどうしといふので、どんなに仲善からうと大ぴらだし、それに自分達にもさういふ安心はあるからだけれど、二人をもつと一緒に置いたら、きつとどうにか色がついたらうと今から思はれるやうなもんでした。ほんとをいへば私の心はたゞぢやなかつたやうだし、繁さんだつてかう私が好きだつてことよりもちつとどうかしてたと思ふ……なにしろまあそんな風だつたんです。

　それで私は、繁さんならいゝなあと思つて微かに胸を躍らせながら、猶もぢいつと見てゐると、ふと向ふの人も私を見つけて一寸立止りました。と不用意に微笑みかけてゐた私の顔が急に引締りました。違う〳〵、丁度同じ背格好、同じ年頃だからだけれど、顔が少し生白い。私はつまらなくなつて、そのまゝ引かへさうとしたけれど、向ふで何やらもの言ひたさうにこつちに近づいて來るのをみると、はつきりその顔を見てやりたいやうな氣がして、何氣なく私も歩き出しました。

　擦れ違ふ時、私は如何にもその男がもの言ひたさうにしてるのをみました。髪を分けた目の涼しい、けれどどつか女性的な顔で、此邊の人らしくはないんでした。

その翌日、そんなことなんかすつかり忘れつちまつて、ほんとに不用意な心で海邊に出て行くと、不意にまたその人に會ひました。そして私に昨日よりも一層親しみあるやうな眼を向けました。それからつてものは、私は出るたんびにその男に會ふんです。丁度、この男は一日中かうして出歩いてるんぢやないかしらと思はれるやうに、かうなつて來るとお互に變で、そんな時は、向ふもだけれど、私は自分の眼や口の始末に困るやうな氣がしました。

それでとう／＼男から口を切りました。

「お散歩ですか？――――」

それは或日のことなんです。男はかういつて私に近づいて來ました。

「えゝ。」

私は困つたやうな、その癖少し可笑しいやうな、それでゝなんとなくどき／″＼するやうな胸を覺えました。

「貴女のお子さんですか？」

「いゝえ。」と、私はとんでもないといつたやうな調子で思はず聲をはづませました。私はとよつていふ小さな姪をその時おんぶしてゐたんです。

男だつてほんとにまさかさういふ積りぢやなかつたんでせうけれど、思ひ切つてつかまへた話のきつかけを、如何にかしてつなぎとめようとわく／＼してこんなことが言へたんでせう。

男はそれから少し大膽になつたやうでした。

「ご一緒に散歩しませう。」とひたり寄り添ふやうに一層私に近づきました。と人見知りする背中のとよ子が、私の肩にしがみついてふす／″＼と泣き出します。それに私もなんだか落着のない心でしたから、

「私、もう歸らなけりやなりませんわ。」といふと、おつかぶせるやうに、

「まだいゝぢやありませんか、ね？　も少し歩きませう。」

私はそのまゝだまつて、暫く並んで歩きました。

遙かに沖を行く船の姿に、そろ／＼夕暮の氣が見え出して來ると、色を增した浪に音までが少し高くなつて行くやうな氣がします。足許を覘(ねら)つて寄つて來る潮が、さあと引いて行つたあとに、打揚げられた白い貝殼が寂しく光つて居る。ぽつ／″＼と散歩から歸りかける人の姿が、限りなく續いた砂の上に、或は松林の中にちら／＼してました。

男はさく／＼と砂を踏んで歩いてゐましたが、一つの小さな乾いた舟の近くに寄つて

行つて、そのへりに袂からハンカチを出して敷きました。
「おかけなさいな。」
「ありがたう。」
私はそろ〳〵眠りかけたとよ子を揺りながら男の前に立つてました。
「貴女はこゝの方ぢやないでせう？」
「えゝ。」
「お國はどこ？」
「…………」
私は默つて笑つてました。もうあたりはほんとに暮れかけて、私のしめた赤い繻子の帶が妙に頼りになるやうな色にはつきりしてゐます。
暫くすると男は、
「貴女今晩こゝに來て下さいませんか。」と囁くやうに言ふんです。
私は下駄の爪先で足許の砂を掘りながら、
「えゝ。」と小さな聲でいひました。
私はあした、暫く親しんだこの海邊にさよならをして、母と一緒にまたあの嬉しい北國に歸らなければならないんでした。なんにも知らぬ男が、その前夜になつて二人が近づけたのを喜んでるらしいのが、私には擽つたく、可笑しくもあれば快くも思はれました。そんな心持を經驗すると、私はもつと〳〵男を安心させて置きたいやうな氣になつて、
「ぢやきつとね！」と男の目をぢつと見てやりました。
私はその夜どういふ風にして家を出ようかと頻りに考へました。嚴格な母が、どうして私一人の夜の散歩なぞを許して呉れませう。私が人知れずさま〴〵に心を砕いてゐると、不思議にも母は私にあしたの買物の爲めに町までの使ひを頼みました。私は思はず胸を轟かせました。と母はまた思ひかへしたやうに、私も一緒に行かうといふんです。困つたなあと思ひながら、それでも仕方なしに私は母と一緒に家を出ました。
外は人の世とも思はれないやうな浄い月夜でした。濱邊の砂は丁度白い絹でも敷いたやうに、そこに捨てられた漁船の幾つかゞ、墨繪のやうな影を投げてゐました。磯に添つた少しばかりの町で用を済した母と私は、お互に何かを考へるやうな風で、默つて松原の中にちら〳〵灯影の見える家の方へと歩いて行きました。
と、ちらと二三軒先の家の脇から、砂濱の方へと消えていつた人影がありました。そ

の家の前をやり過して、猶二三歩だまつて母に添つて歩いてゐた私は、とつぜん、
「あ、歯磨を買ふのを忘れつちやつた！」と立止つてしまいました。
「まあ！」と母が何の懸念もなさゝうに立止ると、
「私、一走り行つて來ますから、お母さん一足お先に歸つてゝ下さいな。」と、言ひ捨てゝ私はすた〳〵と後に引きかへしました。
　暫くして一寸振りかへつて見ると、母は格別急ぎもせず、ゆつくりして足取りで、細長い影をひきながら向ふに歸つてゆきます。それを見送ると、私はついと家と家の間に自分の體を隱してしまひました。
　俄に潮の香がきつく私の鼻を打ちました。早寢した漁夫の家の屋根に生えた草が、月影を浴びてその葉裏が光つて居ます。此時私の足音にふと振かへつた人影は、暫く立止つて瞳を凝らしてるやうだつたが、家と家の遮りから全く月に現はれた私を見ると、つと寄つて來て、
「よく來て下さいましたね！」
　私はその時殆んど本能のやうに男の方の側(がは)の手を小八つ口の中に入れました。
「ほんとによく來て下さいましたね！」と重ねた言葉の息が私の耳近く消えたと思ふ間もなく、
「ね！………」
　男の手は稲妻のやうに私の首に巻かれようとしました。
「いやですよ！」
　私の聲は、私ですらびりつとしたほど疳走つてました。
　はつとして水でもかけられたやうにすべての働きをとめた男は、一寸の間意識を失つた人のやうに私を見つめてゐました。やがて男は少し赤くなつて、
「どうも失禮しました………」
「いゝえ、私、母が待つてますからもう歸ります。さよなら！」
　私はくるりと踵をかへすと、振り向きもしずに見えなくなつた母の影を追ひました。
　ほんとに私の白い顔が、丁度お面のやうに見えるだらうと思はれるほど少しの隅もない月夜でした――。
　そのあした、私はほのかな心を繁さんに殘して、振りかへり〳〵その濱邊を去りました。

（完）

底本：「青鞜」大正三年一月
テキスト入力：小林　徹
公開：平成二十九年七月二日
改訂版公開：令和五年三月二八日
リンク：水野仙子ホームページ